

大陸（満州）

私の軍隊体験記

茨城県 酒井武雄

名峰、筑波山と関東の清水寺として知られる峰寺山に囲まれた柿岡盆地で、農家を営んでいた父酒井定、母やすの長男として大正十一（一九二二）年四月三日（神武天皇祭）に生まれました。この日にちなんで「武雄」と命名したという。

親たちは、もう三日早く生れれば、一年早く入学できるのにといい、当時は現在のように出生届は厳格でなかったから、三月三十日生れとして届け出た。

我が家では水稻、養蚕を主とする農業をしてい

た。父が養蚕組合の組合長のとき繭の販売先が倒産してしまった。米、大麦、小麦は母任せで、父は繭代金の清算交渉にかかりきりだったが交渉は難航し父は心身共に疲れ果てていた。

小学校の高等科の卒業も間近になり、石岡農学校に進学したいと思っていたが、我が家の現状ではとても無理だと思っていたが、そして柿岡の補修学校に入った。間もなく農業青年学校と名称が変わった。二年間の勉強も終わり、卒業式には「農業実習優良賞」を受賞した。

昭和十四（一九三九）年秋、父が直腸がんにかかり治療の甲斐無く翌年一月一日に亡くなった。四十二歳の若さであった。祖父母、母、私、姉、妹三人弟一人の九人が残された。葬式は皇紀二六

〇〇年の一月三日でした。

昭和十六年十二月八日、大東亜戦争が勃発してから半年後、徴兵検査で私は甲種合格となった。そして昭和十八年二月一日、福島県郡山市の東部第六十六部隊に入営との通知を受けた。入営のため出発する日は早朝から親類、友人たち多数が集ってくれた。

前夜の降雪で見渡す限り銀世界のなか、見送りの人たちに入営のあいさつをする。祖父母と女、子供を残して入営する私の気持ちを述べ、留守中のことを特にお願ひした。手塩にかけて育てた愛馬も、半年後には軍馬となることが決まっている。その愛馬に乗って雪の道を出発した。常磐線、水郡線と乗り継いで、福島県郡山市の旅館に宿泊する。その晩、部隊から曹長殿が来て、入営についての細かい説明があった。昭和十八年二月一日、東部第六十六部隊の営門をくぐり、晴れて帝国陸軍軍人となる。

郡山は寒かった。隣の県なのだが、こんなに寒

いとは思わなかった。「どっぽ」とよく言われたが、何のことか分らなかった。私たちの教育班長、白岩軍曹にこのことを尋ねると、我々の部隊は満州国熱河省承德の第九独立守備歩兵第十三大隊であった。これを略して「独歩」と呼んでいたのだ。

熱河省は毛沢東の率いる共産第八路軍の拠点で、我が部隊は交戦中のために、基礎教育を内地で学んでから渡満するのであった。教官は山本中尉、助教は青木軍曹、白岩軍曹、安部伍長であった。

青年学校で基礎教練はできていると思っていたが、軍隊となれば厳しさもまた格別だ。一カ月余り厳しい教育を受け、三月十日の陸軍記念日には、部隊の演習に参加する。

郡山での教育も終わり渡満のため部隊を出発した。列車は一路南下し、下関に着く。関釜連絡船に乗ったときは、海も静かで気持ちよかったが、沖に出ると波は荒くなり船内を歩くこともできない。生れて初めての船旅は、船酔いで食欲は全然ない。船酔いしない戦友は笑いながら、こんなに

うまい食事を食べないなんて、もつたいないなあ
と話している。やつと釜山港に近付いたころは船
酔いも治まり、気分もよくなった。

列車に乗り車窓から見る朝鮮の景色は珍しく、
建物も服装も海一つ越えるとこんな違うものか
と思った。朝鮮を縦断し満州に入ると、また風景
も違った。なんとなく遠くに来たのだなと感じる。
七日間の旅も終わり承徳に着いた。

ここは留守部隊で大隊本部と第一中隊は興隆に、
我が第二中隊は北支河北省馬蘭峪バランコクに駐屯している
のだ。第三中隊は六撲子リュウホクシ、第四中隊は芽山マウザンに分駐
し、地区の治安に努めた。

承徳に着いた翌日、古兵が洗濯物を持ってきた。
軍服上下、略帽、防寒頭巾（頭にかぶるもの）襦
袢、袴下、見ると血のりがベツトリと付いたもの
だった。戦地であることは自覚していたが、いま
目の前に戦死された先輩が着用していた被服を手
にして、感無量であった。

翌日はトラックに乗せられ大隊本部のある興隆

に到着、ここで一日休養となる。ここから中隊所
在地までは完全武装で途中、野営（野宿）をしな
がら行軍することになった。小銃、軽機、擲弾筒、
重機関銃、歩兵砲と五班に分けられる。私は重機
関銃だった。それぞれに武器を携帯したが重機関
銃はこの時なかったので小銃を持った。

行軍途中に中村勇雄君は軽機関銃を担いでいた
が、とても苦しそうだった。「軽機関銃、代わって
やろうか」「すまないな」と疲れた顔で軽機関銃を
渡した。「だれが代わって良いと言った。軽機ぐら
い担げなくてどうする」小休止の時、軽機の青木
班長から二人とも叱られた。

中隊は馬蘭峪に駐屯していたが、初年兵の教育
は四キロほど離れた南大村で行われた。宿舎は城
壁に囲まれ望楼と衛兵所がある。いよいよ戦地で
の教育が始まった。教育助手は橋本兵長と鶴田上
等兵。ここで初めて九二式重機関銃を見る。

教育の初めは銃の説明で、兵長が分解し班長が
解説する。その部品の多さに驚き、用語は初めて

聞くものばかり、分解した後組み立てができるだろうかと不安ばかりであった。戦闘の演習は、手が模範を示し初年兵が順番に行う。各任務は、一番は小隊長との連絡、二番は装填手、三番は予備射手、四番は射手、五番は給弾手、六番から八番は弾薬手である。

ある日、班長引率で他班の演習を見学した。まず軽機関銃班、班長の号令は「目標、○○の重機関銃」「撃て」。次に擲弾筒班、これも「目標、○○の重機関銃」「撃て」。歩兵砲も小銃も同じであった。「他班の演習を見て、どうだった。すべての砲火は、我が重機関銃を目標にしている。それはなぜか、威力があるからだ。重機を破壊すれば戦闘が有利に展開する。だから非常に危険が多く、このことをよく知っておけ」。

その日から特に低姿勢が要求され指導が厳しくなった。「多流汗、少流血」の説明を受け、演習もより以上に熱が入った。教育期間中もよく討伐に出た。「第一機関銃は右の高地、第二機関銃は左の

高地」と小休止のとき中隊長は必ず命令を下した。他の班はその場で休憩できるのに、重機関銃はいつも山の頂上に行かされる、部隊の安全を守るためには、やむを得ないのだろう。出発の命令があれば、山から下りるだけ余分になる。戦友たちと「重機関銃は割りが悪いな」と語り合ったものだ。

夜間演習が行われ、私は四番射手であった。班長が小高い丘に陣地を選定する。「十字鍬の方向、銃を据え」「射撃準備完了」「撃て！」の命令で射撃を開始。演習だから実弾でなく空砲だ。すると先方から銃声が出た「撃ち方やめ、下がれ、下がれ」せば詰った班長の声。あまりの声に驚き二番の装填手は何も持たずに下がってしまった。二番と四番が協力して銃を移動することになっていたのに……。仕方なく私は重機関銃を引きずり下ろした。この状態が何であったのか、私には分らなかつた。鶴田助手は弾薬箱を撤去してきた。夜間演習は中止となり部隊に帰ってから、この状況説明があった。それは夜間演習のことを友軍の満州国軍に連

絡をしてなかった。それで満州国軍は、我々を八路军軍と思つて応戦したらしい。

満州国軍は前方でなく、側方にいたので非常に危険な状況であつた。弾丸がどちらから飛んでくるのか、初年兵には全然分らない。二番は重機関銃を、五番は弾薬箱を撤去する任務を放棄して下山してしまつたのだ。

演習は終了となり解散となつた。教育助手は初年兵を整列させる。「貴様ら、それぞれに責任をはたしたか」「……」「重機関銃はだれが撤去したか」「私は手をあげた。」「弾薬箱はだれが下げた」「六番以下が手をあげる。

「前列回れ右、対向びんたはじめ」初年兵たちは手加減して前にいる戦友にびんたをやる。教育助手は「びんたとは、こんなふうにするんだ」と片端から全員を殴つた。それから仕方なく手荒く殴り合つた。

熱河の山岳を踏破して、討伐に明け暮れた一期の検閲もやつと終つた。襟の星も二つになつた。

入隊した時に「乗馬を好む」と記載したから、第二期の教育は馬取扱修業だつた。場所は熱河省承德、独歩第十三大隊の四個中隊合同の教育であつた。

乗馬はあぶみを外して乗る。初年兵はよく落馬した。内務班には落馬表が作られ、落馬の数だけ黒丸がつけられる。私は子供のころから裸馬に乗つていたので落馬はなかつた。黒星なしで教育は終了した。

乗馬演習をして内務班に帰ると、タバコ、羊かん、キャラメルの配給があつた。私はタバコは吸わないので甘味品と交換して内地の母や妹に送つてあげたので六十年も過ぎた今でも、兄弟が集ると、このことが話題になつてゐる。

ある日、馬蘭峪から古兵たちが出てきた。その中の丁古年兵（一年以上勤めて二つ星の人を呼ぶ）に呼び出され、兵舎の裏に集められた。「貴様ら、たるんでゐる。気合いを入れてやる」と片端から往復びんたの連続であつた。初年兵たちの顔がは

れあがった。

Tは殴り終わると帰って行った。我々はなぜ殴られたのか分からない。「お前ら、その顔はどうした」内務班に帰ると柳沼兵長に問われた。初年兵は返事ができない。「だれにやられた」「T古年兵殿に殴られました」「どんな悪いことをした」「たゝんでいるからと」。

「Tを呼んでこい」一人が呼びに行き、Tは兵長の前に立った「T、初年兵を何の理由で殴った」「……」「理由もなく殴ったのか」「……」Tは無言だった。すると兵長の鉄拳が飛んだ。体の大きくないTは、ふつ飛んだ。「起きてこい」Tは直立不動。「初年兵いじめをするな」ともう一発。「帰ってよろしい」。初年兵たちはうれしかった。

第二期の教育も終わり上等兵に進級した。私は鈴木残留隊長の馬当番となり朝夕、送り迎えが任務となった。小さな満州馬に乗り、隊長殿の乗る日本馬を引いて官舎に行く。奥様からおいしい菓子を何度も頂いたことは今でも忘れられない。日

常は乗馬と馬の手入れ、好きな馬と共に暮らす毎日が楽しく、まるで天国にいるような気分であった。このようにして丸一年が過ぎた。

乗馬の訓練をして内務班に帰ると全然考えてもいなかった、第一選抜の兵長に進級したことの知らせであった。同時に進級したのは中隊で三人。鈴木残留隊長殿が私を過大評価して中隊長に報告されたものと思われた。何はともあれ、うれしかった。続いて特別下士官補充要員として旅順の下士官教育隊に派遣を命じられた。

このころ第九独立守備隊が第一〇八師団に編成替えとなり第十三大隊が第二四〇連隊になった。北満から続々と将兵、武器、軍馬などが転入し、在満居住者の召集もあり、ごったがえしの状況であった。

同時に教育隊に派遣を命じられたのは重機関銃の酒井と河村兵長と擲弾筒の高橋兵長の三人であった。連隊副官に申告して副官から訓辞を受け汽車に乗った。

独立守備隊は満鉄の警備が任務だった。襟のマークはレールの断面に小銃を交叉した形で、このマークを付けていれば切符なしで乗ることができた。昨年の渡満以来、初めて汽車に乗った。

旅順に着き営門をくぐると、歴史のある関東軍の下士官教育隊の貫禄か、思わず身が引締る。人間改造所と異名ある教育隊は想像以上に厳しかった。

舎外は三步以上は駆け足、朝の起床は不寝番が「起床五分前」と声をかける。候補者は寝たまま手足を動かし起床の声を待つ。「起床！」の声と同時に飛び起き、まるで戦争だ。点呼は銃剣術の防具を着用して行われ、点呼後は銃剣術の練習となり、裂ばくの気合いが周囲に響き渡る。候補者はみな真剣で、演習の休憩時間も典範令（教科書）を広げ、雑談する人は一人もいない。

ある月曜日、重機関銃中隊と歩兵砲中隊合同で戦跡地巡りが行われた。引率者は歩兵砲の教官であった。初めに水師営。日露戦争で乃木大将とス

テッセル將軍の会見場。庭になつめの木があり建物は粗末なものだった。

次は東維冠山。コンクリート造りの陣地で乃木軍は甚大な損害を受けた所だ。地下に横穴を掘り敵陣地の下で爆薬を仕掛け導火線の接続に当たった一人の工兵は万が一接続が不具合だったらと案じ、線を持ったまま爆発させたそうである。

望台砲台は急な山頂にあり教官は山頂まで早駆けを命じた。私たちは熱河の山岳で鍛えられていたので苦もなく山頂に立った。爾靈山はゆるやかに深さ一メートルぐらい幅二メートルの塹壕が頂上まで数十段も造られている。候補者は山すそに一列横隊で並ばされた。「山頂に向って突撃！」候補者は塹壕に入っては登り、登っては入り、頂上に向って突進する。やっと突撃は終わった。教官は「この方向の候補者に笑い顔が見られた。やり直し」候補者は山裾に戻される。やり直しは七回も繰り返され、くたくたに疲れた。

「成功」やっとこの声を聞くことができた。休

む間もなく「非常事態発生、速やかに教育隊に集合せよ。営門では到着順を記録している」と命令を下し教官は馬に一むち走り去った。

候補者は十キロ余りを全力で走った。くたくたになって営門をくぐる。私の到着順は中ごろであった。翌朝、起床一時間前のことだった。「非常呼集、営庭集合、体操衣着用」そこには昨日の歩兵砲の教官が待っていた。見ると四メートルほどの丸太棒二本が用意されている。

「ただ今より歩兵砲中隊と重機関銃中隊の棒倒し競技を行う」「突撃」の号令で始まり重機が勝った。「歩兵砲はなにをしとる。もう一回突撃」またも重機が勝った。教官の目は吊り上っている。「突撃！」と呼んだ。

我々は「手加減しようぜ」とささやき、歩兵砲が勝った。教官は「今朝、通常と同じにすると演習にならない。人間は気の持ちようだ。昨日の疲れを吹き飛ばす必要があった。今朝の非常呼集によって、今日の演習は通常どおりにできる。解散」

この訓辞には納得した。確かに通常と同じ起床だったら、足、腰が痛くて十分な活動はできないだろうと思った。六十年を過ぎた現在でも、爾靈山の突撃七回その後、教育隊までの十キロ余り早駆け、そして翌朝起床一時間前の棒倒しは、忘れることができない思い出である。

かくしてどんな苦痛にも負けない。どのような苦痛にも耐えられる。止まることを知らず前進することが身についた。ここにきて人間が改造されたことを自分でも分かった。

旅順での厳しい教育も終わり原隊に復帰し、陸軍伍長に任官、教育班長となった。初年兵は在満の召集兵だった。中隊長は召集された幸田少尉。温厚な人であった。関東軍司令官の命令で私的制裁が禁止され兵は弱くなった。南方方面の戦況が思わしくなく戦闘方法も変らざるを得ず、種々変った対戦闘法の修得のため再び旅順へ三カ月間派遣され、対戦車戦法も習得した。原隊復帰して連隊の乙種幹部候補生教育の助手を命ぜられた。

昭和二十年八月九日、ソ連が突然侵攻してきた。教育隊は司令部の裏山に陣地を造り対戦準備を完了した。しかし、露兵出現にも射撃の命令はなく下山命令で全軍が営庭に集合した。部隊長は終戦を語り武装を解除することを告げた。

ソ連の一方的な侵攻と終戦の勅語など知るよしもなく、命令とはいえ納得できない気持ちであった。軍人の魂として、自分の体よりも大切にし日夜手入れしてきた武器は、単なる物としてすべて衛兵所の脇に積み重ねられた。進駐してきたソ連兵は少数だったので、夜になると間断なく自動小銃を空に向かって乱射している。不安に耐えられなかったのである。

終戦後はモンゴルに抑留されズーンハラ農場に連行され、昭和二十年十一月十三日より「燕麦」の脱穀作業に従事した。食事は高粱がスプーンに四杯くらい。野菜を煮込んだものが飯盒の蓋に八分目だけ。五十日で三十人が死んだ。

翌年夏ウランパートルに移され道路作業。体温

三八度以上でないと言われ作業休になれない。二度目の冬は生き地獄だった。採石場のハツパの穴掘りで一メートル以上深い穴を吹雪の中でやらされ、凍傷患者が続出した。

夢で、石山の堅い石が黒パンに見えた。無尽蔵の黒パンを腹いっぱい食べた。力がもりもりついた。という夢を見た。

春になり建築現場で二人で丸太切りをやった。

昭和二十二年六月末、足がはれて曲げると痛い。アムラルトの病院に入院したが薬が無い。一カ月で退院させられ、レンガ工場に行かされたが病状悪化で再入院。十月帰国準備で原隊に戻る。ソ満国境の所持品検査で紙類は白紙であっても全部没収された。

十月三十一日、ナホトカ着。若い日本人共産党員が人民裁判を開き日本人将校を槍玉に上げる。待ちに待った復員船「英彦丸」に乗船、函館に十一月七日に着いた。

現金三百円と毛布の半分頂く。留守宅に電報を

打ち、帰途水戸の県庁に復員届を出し、なつかしの石岡に帰る。

母、妹に五年振りの再会を果たしたが、海軍通信兵を志願した弟の輝男の姿は無かった。昭和二十年二月十七日、小笠原古関において潜水艦と運命を共にしたと聞かされた。

捕虜三年の貴重な体験

佐賀県 高田勝 巳

早や戦後六十一年目の冬が訪れます。冬を迎える夜にシベリアでの悲惨な思い出が目に浮び、戦争の悲劇に胸が痛みます。

私は大正九（一九二〇）年六月七日、佐賀県鹿島市大字山浦の農家の弟妹三人の長男として生を享けました。両親を助け、米と麦の耕作に従事していました。昭和十二（一九三七）年七月七日、支那事変が勃発し、農村の青壮年にも赤紙の召集令状がきて、働き手が次々と出征して行きました。その度に隣近所の人々は日の丸の小旗を持って出征兵士を送りました。私も出征兵士を見る度に早く兵隊になりお国のために少しでも役に立ちたいという気持ちでいっぱいでした。

昭和十五年六月中旬、鹿島市の中正閣で徴兵検